

IV 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、瓦埴類、土器、木製品、古墳時代の鍬形石である。遺物は遺構の密度が低いいためか、全体に少ない。

1 土 器 (第7・8図、図版8)

井戸S E015・S E020・S X016、土壌S K013・S K052・S K055、溝S D010・S D014・S D022・S D040及びS X030から土師器、須恵器が出土した。時期的には奈良時代初頭から奈良時代末葉に属するが、奈良時代前半の遺物が多くを占めている。土師器は井戸S E020から出土した甕およびS K013出土の盤の2例を除いて、保存状態が悪く、細部の技法については不明な点が多かった。

土壌S K013・溝S D014出土の土器 (10・11・14~26) 土壌S K013は井戸の付属施設S X016との重複関係から、井戸S E020より新しいことがわかる。土師器には杯、杯蓋、高杯、碗、皿、盤、壺、甕、須恵器には蓋、杯、壺、鉢、甕、瓶の各器種がある。時期的には23、24のような8世紀初頭のものから、26、27のように8世紀中頃の土器が含まれている。18は二個把手のついた碗で、珍しい形態である。16は内面に暗文のつく皿であるが、暗文の様子は判然としない。底部外面には指頭痕がみられる。17は底部内面に螺旋暗文のつく皿であるが、16同様に器面が荒れている。

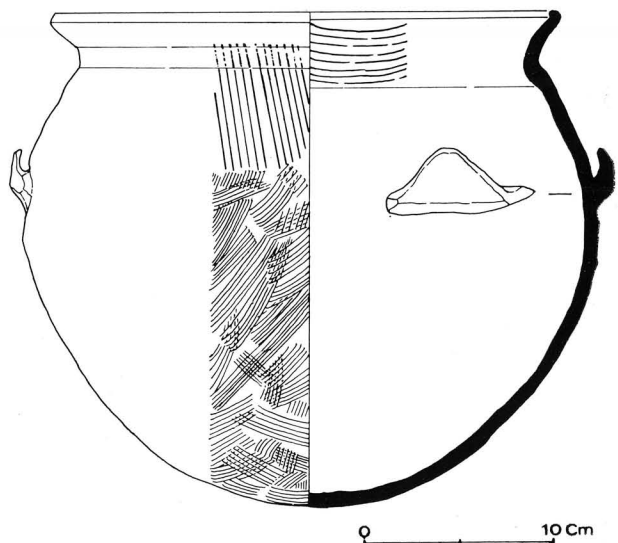
溝S D014は、土壌S K013が埋まったあとに作られた溝である。出土の土器 (10・11) はS K013とほぼ同時期のものである。土師器杯 (10) の内面には一段放射状暗文+螺旋暗文がある。

井戸S E020出土の土器 (3・13) 井戸S E020の上部埋土からは、3の須恵器蓋のように奈良時代末葉の土器も出土するが、土師器甕 (第7図) や13の須恵器盤のような、8世紀中頃を若干下る年代の土器が主体をなしており、これらが井戸の廃絶期を示すものと思われる。なお、甕の口頸部には藤蔓が結んである。底部は煤の付着が著しい。

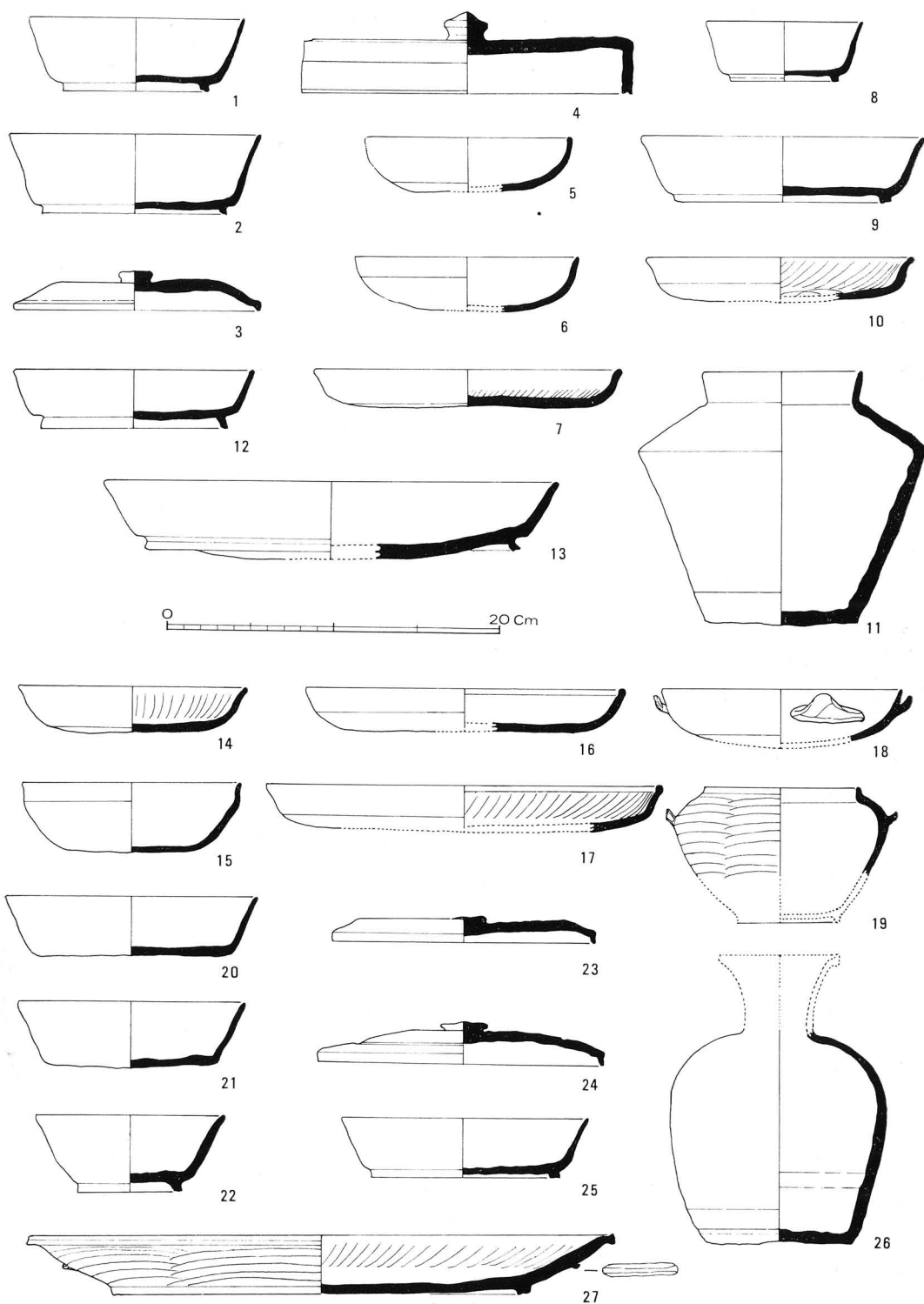
Dトレンチ出土の土器 (4~9) Dトレンチでは土壌S K052とその周辺からまとまって出土した。

S K052出土の土師器杯7、碗(5・6)はb手法で作られており、また須恵器蓋4は、しっかりとした宝珠つまみをもつ古い形態をもっており、奈良時代前半の時期とみることができる。なお杯7は器面剥落がはげしいが、二段の放射状暗文が施されると考えられる。

階段状遺構S X024出土の土器 (1・2・12) 須恵器では杯 (1・2・12) があるが、土壌S K052出土の土器とほぼ同時期である。なお、土師器には、皿、碗、高杯、壺、甕の各器種があるが、いずれも小破片のため省略する。



第7図 井戸S E020出土 土師器甕

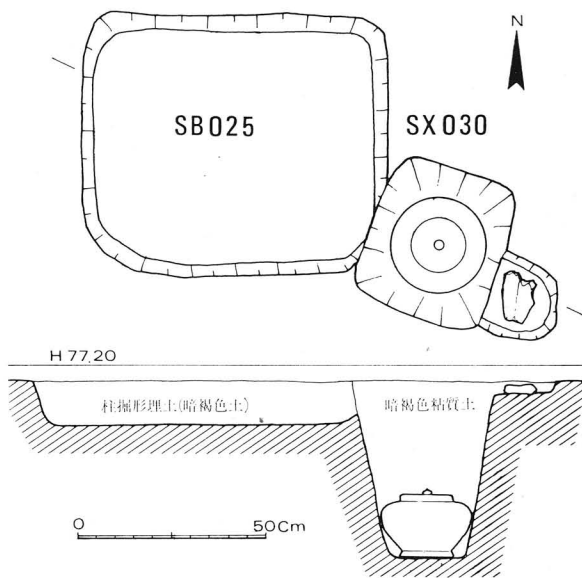


第8図 1.2.12 S X024出土土器 4～7 S K052出土土器 8. 9 Dトレンチ出土須恵器
 10. 11 S D014出土土器 3. 13 S E020出土土器 14～27 S K013出土土器

2 蔵骨器と副葬遺物 (第9・10・11図、図版9・10)

蔵骨器と副葬遺物について述べるまえに、火葬墓 S X030 および遺物の出土状態についてふれる。墓壇は建物 S B025 の柱掘形と一部重複してみつかったが切り合いが僅かなため新旧の断定はむずかしい(第9図)。しかし、建物の廃絶期や蔵骨器の時期から、墓壇が新しいと考えられる。

墓壇の上面は後世の削平を受けているが、一辺 0.4m の隅丸方形で、下方に向かってせばまり円形になる。深さ 0.5m で、壇底に蔵骨器が直接納置されていた。蔵骨器と壁面との間には間隙はほとんどなく、埋土は暗褐色粘質土が均一な状態に入っていた。墓壇に接して浅い凹みに安山岩質の割石が一個あった。墓壇の上面を覆っていた石材とみられる。蔵骨器は発見時には蓋が密着し、器内に透明の水が満ちており、なかに墨、筆管、和同開珎が入っていた。また底には泥状の沈澱物があり、微小な骨片と織物(絹)が認められている。

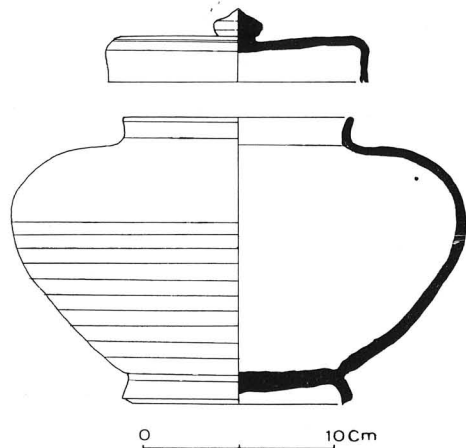


第9図 火葬墓 S X030 遺構図

蔵骨器(第10図) いわゆる薬壺形の須恵器である。わずかに外反する口縁につづく胴は横に強く張り、やや外反する高台を持つ。外面は口縁から胴上半にかけてロクロ撫でで、下半部は横方向のヘラミガキをする。底部外面はヘラケズリで、内面底部はヘラケズリした後に撫でを施す。色調は青灰色を呈し、黒斑が認められる。胎土中には細砂と大粒の長石が入る。

蓋は平坦な頂部と宝珠形つまみを持ち、口縁部は直立する。つまみと頂部は撫での後にヘラケズリを加える。口縁部は内外ともに撫でである。口縁端部には深いヘラケズリの沈線がめぐる。

色調はやや茶色がかった灰色を呈し、胎土中には砂粒が入る。



第10図 火葬墓 S X030 出土 蔵骨器

なお、壺の肩には蓋をかぶせて焼成した色変が認められるが、この蓋の径と異なることや胎土・色調が異なることから蔵骨器に使用する際に別物を揃えたものとみられる。壺は口縁の外反のようす、胴のヘラミガキ、高台のつけ方などの特徴からみると平城宮Ⅲ期(750年頃)の土器に該当し蓋はこれよりやや遡る時期のものと考えられる。壺は高さ15.5cm、口径12.1cm、底径1.12cm、最大径15.5cm。蓋は直径12.8cm、高さ3.8cm。

墨挺（第11図3） いわゆるカラスミ形をした墨である。丸棒状に練り上げたところに型押して片面の中央部を窪ませて截頭舟形につくり出したもので、下面は長軸にそってやや内反りの曲面をなす。表面は細い鮫肌状の襞をしている。二片にわれていたが使用された痕跡はない。正倉院伝世の墨と同形品であるがやや小さい。永い間水中にあったとみられるにも拘らず原形を保っていたのは珍しいことといえよう。

全長10.9cm、最大幅2.7cm、最大厚1.4cm、側縁部厚0.8cm、凹部厚0.45cm、乾燥時の重量13.1g。

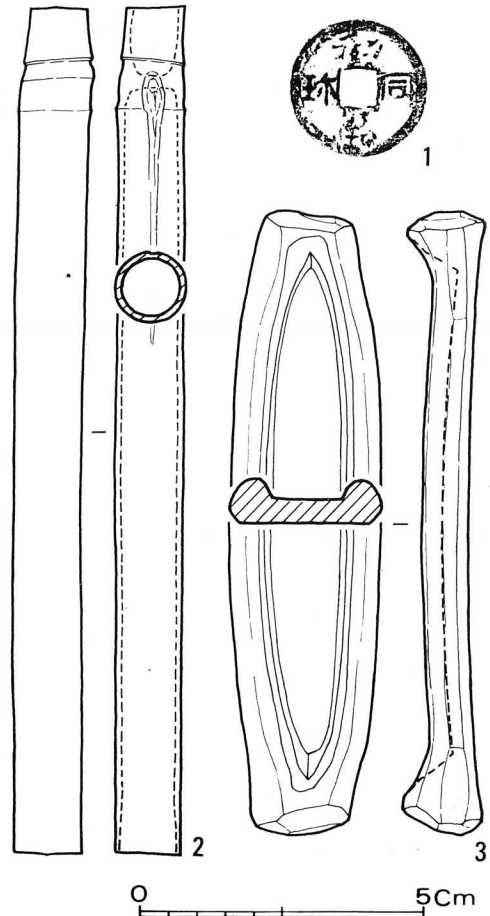
筆管（第11図2） 一端近くに節を持つ長さ14.9cm、直径1.2cmの竹管である。節のない側に筆毛をとりつけたらしく、端部内縁に刃物で刮りを加えて内径を広げている（内径1.0cm）。節のある側は切り落しのままで、とくに加工はない。表皮には斑文などの特徴はなく、篠竹の一種かとみられる。

和同開珎（第11図1） 全部で4枚あるが、3枚は器底に錆着している。うち1枚は背面を上

にしているが、大きさ、形状は他の3枚と等しいので和同開珎とみて誤りないと思われる。3枚はいずれも一般に新和同とする型式で、とくに銭文に特徴はない。いずれも保存状況は悪く、重量をふくめて計測できるのは2枚のみである。

図示したものの数値は外径2.48cm、内郭内径0.66cm、外郭厚1.38mm、内郭厚1.15mm。

以上、今回検出した火葬墓について述べたが、火葬墓がつくられたのは、この地域が宅地として使用されなくなった奈良時代中頃以降に属するが、蔵骨器および副葬遺物から判断して、京の廃絶以降には下らないと考えられる。そうだとすれば、京内に於ける奈良時代の火葬墓としてははじめての例である。京周辺の火葬墓の例としては、奈良市秋篠町、西山、押熊の3つが知られている。西山の火葬墓は、土師器壺に直接埋納されたものらしく、中に和同開珎2枚が入っていた。押熊の火葬墓は須恵器甕の中に土師器高杯があり、これに把手つきのかぶせ蓋のある土師器壺がのっていたようである。いずれも奈良時代とみられる。また、佐保山、高円山などの京北、京東の地で火葬した史料がいくつかあることから、京城をはずれた奈良山丘陵、春日、高円山周辺が葬地となっていたようである。しかし、これらはいずれも京の周辺であり、今回のように京の西辺部とはいえ、明らかに京内に墓が営まれたとすれば、喪葬令の規定（「凡皇都及道路側近並不得葬埋」）との関連が問題になろう。



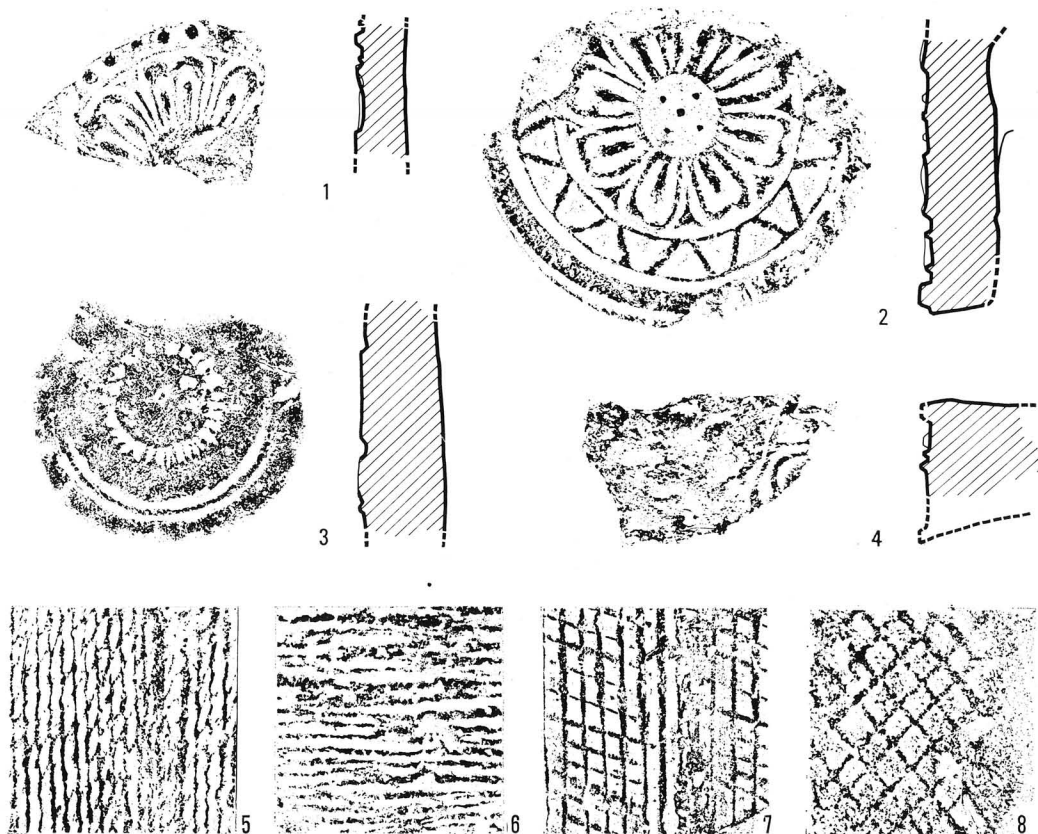
第11図 1.和同開珎 2.筆管 3.墨挺

3 瓦塼類 (第12図、図版11)

瓦塼類は軒丸瓦4点、軒平瓦1点、若干の丸平瓦、塼2点である。出土量は極めて少ない。丸平瓦はSD001の付近から比較的集中して出土する傾向が認められたが、他はいずれも遺構との関連で出土したものではない。

1は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、中房に珠文を二重に配する7世紀末葉の瓦である(6275型式)。2は単弁8弁蓮華文軒丸瓦で、外区内縁に大きな鋸歯文を、外区に幅広の突帯をめぐらす。瓦当面は平坦で、一見すると地方的な瓦当文様を呈している。同范例は平松廃寺、横井廃寺で出土しており、奈良時代後半の瓦と考えられる。3は蓮弁、中房ともに磨滅がひどく、その文様は不明であるが、中房が突出していることから、平城宮跡出土の複弁8弁蓮華文軒丸瓦6304型式であろう。軒丸瓦はこの3点のほか近世の巴文軒丸瓦が1点出土している。4は今回出土した唯一の軒平瓦である。小片のため、上外区の珠文と内区の唐草文の一部が判明するのみである。

丸平瓦は、やや厚手で軟質の赤褐色を呈するものと薄手で硬質の灰色を呈する2種があり、他に7世紀末葉のものや巴文に伴うものが若干出土する。平瓦の叩き目は、縄叩き横位・縦位、格子目のものがある(5～8)。格子叩き目は宮内出土の軒丸瓦6135—軒平瓦6688に伴う丸平瓦にみられるものと同種である。他に長方形塼が2点出土している。



第12図 軒瓦および平瓦叩き目

4 木製品 (第13図、図版11)

S E 015・S E 020から奈良時代の木製品10余点が出土した。S E 020 出土の木製品には、曲物 8 点のほか刀子柄 1 点がある。いずれも井戸底からの出土。

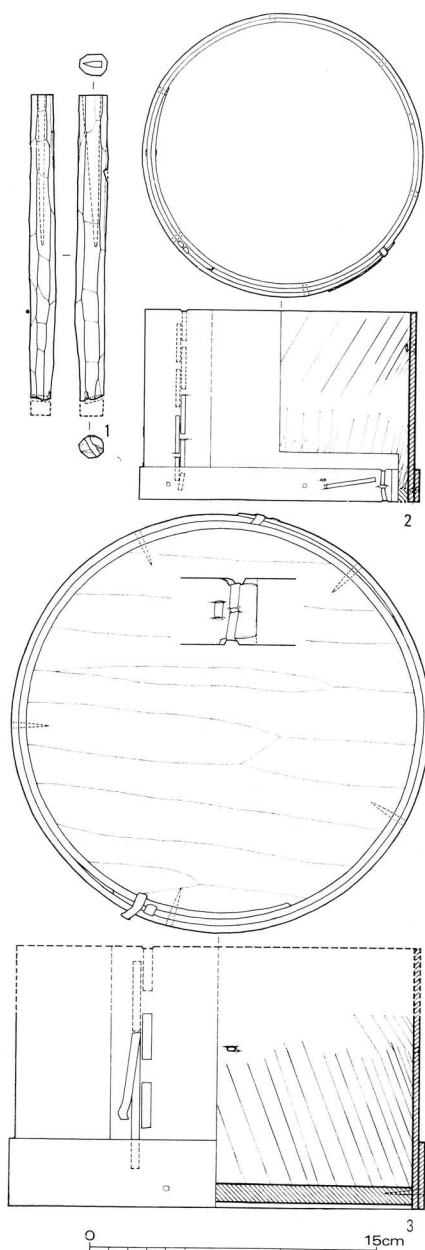
曲物 (2・3) 2は径14.2cm、高さ9.9cmの容器の身であるが、底板を欠く。下端に幅1.7cmの箍を巻き、6箇所木釘を打込む。側板は内面に斜めと縦の刻線をいれて曲げ、重ね部分の両端2箇所で樺皮縫いする。1箇所は2列で、上から5段で縫い、さらに脇によせて下から4段で縫い終るようである。他は1列で4段であろう。箍は縫い合せ部分の上下を切欠き、下から1列2段で縫いさらに横に引出して1段縫いで終る。側板には上端から1.9cmの所に小孔が一つあるが、これと対称の位置は欠損。内面は黒色。3は径20.6cmの底板に側板をつけ、下端に幅3.5cmの箍を巻いて5箇所木釘を打込む。側板は上部を欠くが、縫い皮の状態から高さ13.5cm前後と思われる。縫いは2と大差ない。側板、箍とも1箇所2列で、それぞれ3段と2段、2段と1段である。側板には2と同様に小孔が一つあるが、他にこれと関連する孔はないようである。内面は黒色。以上のほか底板1点、側板2点、箍3点が出土したが、いずれも残片である。側板、箍各1点には対称の位置に1対の孔があるものがある。

刀子柄(1) 残長16.1cm、最大幅2.1cm、最大厚1.4cm。断面八角形で、背側をやや厚くし、柄頭部の腹側を削って幅を狭める。一端に刀子の茎を焼込み、他端近くに斜めの1孔を焼火箸であける。

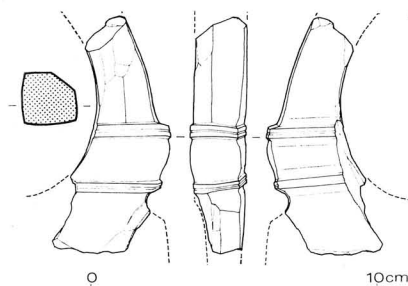
S E 015からは曲物底板、箸の残片各1点が出土した。

5 石製品 (第14図、図版11)

鍬形石 奈良時代の土器を含む土壙S K 013から出土した。残長8.2cm。環体部と板状部の境の部分の破片である。環体は弯曲が強く、板状部はやや上方に反る。節部の両縁には1条の刻線をいれた凸帯がめぐり、板状部の外縁上部に小さな抉りがある。表面はやや風化している。緑色片岩製。鍬形石を副葬する4世紀後半の古墳が付近にあったのであろうか。



第13図 1 刀子柄 2. 3 曲物



第14図 鍬形石